三十三

壬子日記

十月十一日朝ヨリ
同十二日昼ニ至ル

栗庵

特別
へ5
6581
33

十月十二日　雨天　未之刻至雨止

此霜直樂翁寫候町寫承候ニ付度寫申候之由
支被ニ用ひ此由ニ候而前申不能候

両吟

雲を何と[illegible]難し小春鳴り　紙鳩

杉も梢も同しに[illegible]　萬春

請されん[illegible]釜の下[illegible]書讀り

へ5
6581
33

7

音にも聞し玉川の傍　加
徒に見る鏡ならぬ里　、
古川枯葉流るる扇子よ　寿
人あまた代る嫁当置しき　、
嫁はる老なる秋の暮れ　加
枝も川雨の宇治の妻の月　寿
茶碗に遂し茶葉なれよ　加
初物の竈にて炊く稲の穎　寿

蚊の声にまた風にたる桃の海　加
雲に気も暖かう里の月涼し　寿
杵土やなき藤の菜たすめ　加
諸翁たち鳴き入りし若き桃　寿
半買の風くうれ的よ　加
市そ際質の櫻に見え也　寿
鉄に切そへやろ阿るを勝そ　加
精進なる盆の年も出初りり　、

山寺乃神楽ならはしたる處　素
雲から木地をはらし月の梅踏　加
酔僧をからし柚する昔話　素
鈴蟲をとらんて語る大原道　加
隣りの茶会く　杉間乃富士　素
菜り葉乃風の之天籟句やりし　、
鍋海蠣の子のみ皆あぐし　加
観ろしや東り搬ふる盤　、

孫もし千里ある月乃記筆　素
春ちるの經り袖あし下露　、
花地崩れあと佐の秋　加
秋意の中山清宗寺　、
むしれしもあし乃文ゟ　素
客人かゆかり語れる声遠さ　、
白きあかり云來乃を　加
夜の船出かれをゆく舟句ひ　、

さん俵を情あれ[illegible]　　[illegible]

右

[illegible]精也精しの[illegible]車　　[illegible]那

[illegible]のみ[illegible]家の字　、

網代も[illegible]也雨の二十日晴　、

[illegible]水　濁りの中川原　、

天氣乃[illegible]小田の中の畔こし[illegible]　、

[illegible]の様も道も[illegible]　、

[illegible]も[illegible]の[illegible]　一

右

此[illegible]別[illegible]風[illegible]近[illegible]の[illegible]文
[illegible]

十二日　天氣[illegible]　風吹強[illegible]

此[illegible]雨[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]文[illegible]

せめてもの事に金石館より深川氏の隠居に御暇乞しに
別るゝ日路中まで送り人々に相別れて此所に
立寄て同氏山荘より松枝の京子の海嶽を
一望しに居たる海岸の景致絶て仙の如くに見え
有之様の出来事の有様を見しに尽しかたき風
景なり此處に一泊しぬ

風も秋より落ちて洞に入る　紫加

ちくまるも小松のうちに枯芒

徒歩のまゝの旅の始めに宿りし所々聞く
なれともあれこれもことしもの旅のあはれの始なり
二軒茶屋の家のあるじ小料理して酒肴を調へ
小松といふ所の雪山の話など聞くに
小松より手取川の橋を渡りて目あてに
松井田の駅より此所の家あたりの名所を見
て大都会の三所などもみなこの辺の遺跡にて
俳諧好の弁論などして何事

無徳なる松和尚ハ此人年比の好をわすれて伴ひより給
僧をも日々に清て全ふあれの鏡浦ひつゝ家居みなと
見送らるゝもあへぬ筋れゝす此中に定かならぬ後朝なる
道なれと山家の仮れて雨そゝきなりけれは讃も形し声ひ
集ひの歌りよふ芭蕉翁の君ハ如何にもあるへき形のうち
一句乃はなむけとせんとおもへは一時もよ此行の趣
説もんとせし筒れゆくに竹暮通りても我か行に随ふ所
わしの事ハ幾めを生まれてゆめハさらぬ夢にて界のあと

道徳の様に晴れて遠く家の時は地のさまをして其世治を脈
ひとたよりの一路に旅衾をわたしてこの中に行方は何ぞ
うたひぬ庭のめくりにかれすこし清風中へ写あるもあら
くやみの花安得の梅をおく肩に旅の舞をなし
夕こゝし眺めはちより松のまつの寿の旅
海の綿たちまちにも又一里のあゆみとしのありの袖より
其雨のいでもあまたの月の夏の鏡のかゝりて
して出られけるそのあとの村の旅のありける

寂照入り終りぬ

脇前

東坡中にも見ん筍の日　松和

寂おもふ鋳物権の妹子に響　似帆

かくし世に西の道なき残りけり　、

旅の硯を乾くるも哀し　和

露見ゆる房も雲よるまでの雨　、

響ゆゑ見る静かなる　帆

付鈴ふれ出かる茶の煙　、

人に語れは共に承諾　和

酒蔵を振れ也竹網こふれ也　、

諸葉ふれ煉り醸す　帆

夏の日も更けて更けて　、

雁鳴き振り暁を讓る　和

そよふる袖に寂寥　、

訪ね様の浦の曙　帆

洛の道の轍の十輪の画ハ大先生　加

古乃正しき神の鏡割る　和

雉子の子乃首の飾る　、

人知らぬ恋しき身かな　加

長安の古き物乃橋乃払ふ明　、

雨ぶれ倒れ岸の角組　和

かくりふる風姿乃哀れなる　、

与枝に揺る寺まゐる川　加

禅宗の文に綴る一偈　、

市の傍に廊と騒　和

美人皆之知る藤おもしろし　、

無静なる秋巡営の場　加

草の上常物咲の花咲　、

雑ふ時尾に入れの人至る　和

鬼の旅なるも法ハ世界も　、

あれ月に風の響き味なる意　加

荒川く宮井ちゆふ雅の船のうき　加

秋乃扇ある梯子めし見ゆ候　亀

宇治の源く大道の宿所多ありけり　、

雪ちらしる庵言所多き　加

ちりし谷九年九月乃降りけり　、

老も安く生き松井田の宿　如

右

新しく旅立ち故郷の山廠へ見え小雨ふりしゆ

十三日

天気能　風吹く

勤務能く一夜頭の勤務も此宿ありとき　ゆ松井

ゝ宿人雅ある勤務して旅籠の新気てらし勝手

知りし出家旅籠宿所頭到来旅の知らせゆ

○松井宿旅頭ひりし宿の御用済書致すゆ御殿

御人身勤め中宗めの松井田宿御人馬頭行くかえとれ

荒川厚済よりあらしうち沢陸路て路々出立松井

田の宿中にて一人引見てりける所をと出郷の不分明

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

忘る此中雅楽の舞を出し候[illegible]　緑加

[illegible]官人と[illegible]の[illegible]

[illegible]人を[illegible]人[illegible]三年[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]　梨翁

[illegible]一唱[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]　魁翁

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]人の[illegible]

もまうし明けゆけば駒も[illegible]んと思ふばかりに山路なり
[illegible]西[illegible]樹陰[illegible]風雅
[illegible]
誘ひ入りぬ

あくる暁に碓氷の峠の[illegible]
[illegible]峠は上信の境にして[illegible]
遠くかすみの空に浅間の煙みえあり

一　廿一日　晴　[illegible]

下りはてれば程なく軽井沢なり[illegible]
[illegible]
[illegible]軽井沢の駅に[illegible]
[illegible]女も[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]小田井へ[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]

この[illegible]を[illegible]の[illegible]旅に[illegible]

神[illegible]の大き[illegible]み[illegible]て

[illegible]中[illegible]の上に[illegible]

[illegible]強[illegible]て[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]巨蟾の[illegible]と入りて[illegible]

[illegible]の[illegible]

旅人[illegible]の様[illegible]

[illegible]の[illegible]中[illegible]人

[illegible]巨蟾[illegible]人[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]かの[illegible]

[illegible]と[illegible]の[illegible]巨蟾[illegible]

女[illegible]の[illegible]の[illegible]

の[illegible]の[illegible]

[illegible]の阿[illegible]旅人を[illegible]

せられし後の屋しきも取しけれハ沖の住居の
部類わかれたる浦物の家もすたれ唯鶴ヶ岡一本の松
のこりし大江の秋和や茶屋やらの山に残る碑の
旅なれとも程なく民の國盛の商人のうつりて住けるへに
借事も以中の三ヶ月中とても摂るとて以来其町の二十
二年まて経ること九十六ヶ年の今の本陣をうけて東ハ西
以北湯泉の浜ちかく都ハ兵の以西をそなへて陸より西
龍立へわたりて来るも應されたるとも都の中にて家の中に

儲ろく岳机にのりけれし七郎の隣なりの杉櫻ハなりける
秋のうちに一乃より旅人あつまりて程なる里ときあれかの
めとも程なりしてはやせんなとみ深かりし七郎の作なりし頃
ありとて見る櫻摂なりける頃わたりし酒買ひてもかのめでたき
ならびにて家なりし酒肴なりて旅の祝方のとる
寄せ以りて志らくふてとさらに大男の共しその龍まて
家なる河海し程内ハ沖なり[illegible]わかるともまる人わかの
渡のめを見て奴海[illegible]ぬし七郎も子のなる家の娘

かの子東岸の二条より出雲路河春子ふくさも
かくるまやとみるもの物するうちかりし
糸竹の御賀流も晴けて　御加
晴れし別姉の作る梳の中もん定めの共業清みてる画
欠皿に喜しふとえ中に語りてりけれ滞在えしけれ侍
夜あけしる御明日子の夕の次頭と業清すと
終えし事めての御日の所にて備奉りけ也

十四日

大雨　夜明頃まてし

東屋晴れて朝より雨降りし　此は御説にて宇治へまゐる也
湯漬に梳客に出して解きて雨に御簾の内まて御折と
中に旅の宿の情けあるさまし　此もく御三輪の風にし
地よりかく信御奥形の様にて明りけれ暮さらに大山鹿
に東陣の御様子加茂の山を出して三国寺にて
来てつくるところ三国御子の御前にて参宮せし御
ところつくる夕もの中に御心ひとつに御子の山をまた
御みやの御歳たし出勢の八つの鹿立紅葉の暮の

實に一吹の風に砂まき上て細布の方越中越後を境て
こゝ山寺山深きに雪深かりて遠かりけり此方より吹
風寒く(りこ)かしても此国の人ならぬには松の
下蔭にて旅人にまみゆる旅人の果国に守るかし

胡蝶は此ん寺の松吹く風の音　紙那

洗濯ものも馬も乾ける蟬の声

海雲

辻のなき馬もさはりて蟬の声

追分の駅に来て越前境何此郷といふ人此駅に旅
泊りてとゝめ有りしに此郷にて備へも見えしりく
駅をたちけりけれ

涼しさは磯にや川にて白きそ　紙那

風にしたかひ一しれ　紙のかれ

新に小田井の宿に分りて一夜を過し宿の雪尾張に住の
ちりまきる池こそ見えて二人連なる人の来りて此宿
かてに旅寝をとふ名残りも惜しみ旅人

識まいりて見るに先の人乃云ぬ事ありて物まうし通り

上田原ゆえよろしく馬人引き切りすぐ畑を始めて橋本猪の子

橋本より道まで我をとりし一里半の後より鳥居の所なるをとひし

皆これ道人とりさかる川あり橋わたりは西よりて見る人をとひてありて

かの橋枝ハあまりれども能橋を作らん橋本渡りて見ゆるとする

申しあるしとふらば安くしと通りにも[illegible]ぬ所に[illegible]

[illegible]て[illegible]頭の光ハ西の[illegible]へ[illegible]あるし

あとふらば[illegible]り[illegible]ると覚ゆ小田井の[illegible]に体も

[illegible]まひもあらし[illegible]の橋をとりて[illegible]に[illegible]て

[illegible]も青[illegible]の[illegible]て[illegible]とも

あの[illegible]根しも[illegible]の[illegible]田の[illegible]

ちらく[illegible]しも[illegible]○中近江[illegible]

一[illegible]見[illegible]○[illegible]の[illegible]

[illegible]○[illegible]の人[illegible]

[illegible]蓮[illegible]入[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]先[illegible]も[illegible]

巨遅ニ成て体ある一眠しけるに流石に快し若宮ハ鉄あかりて
出きる所済めの室ともすかとも段く来りて大広の床版出る
入れ石人にの初とりし弥ニ浪々の新をと勝れし家々に表
出ゐたる之模様ある若けれ杯に付図の天地表にけと
趣を写されく快く会後ある古ある右に扇を出しけり
九ツ時にさりぬるも取ろく此紀書で書しか若宮松井図
乃御絵より大きく書写りく今にりなる飯浪備を四ツ割る
此紀本書く事ハ余後和らく巨遅ニ振ヘく快く作を見るの

常ゐるにのつゝく快よしいかにか家の之安場墓面外まし過して
其ろそも経を遠らか窓まくこれらく傾しこれも予ハ旅しみ
呼ろ知られて陽く新居の如し

十五日

快晴 大暑 未刻より雲形に早天 未刻
常ゐるさ雑くれて皆後ゐくのの東森へれまれし此の中此ハ開る綾
の隣ゟあくて是はしのまく雑り むしき和ぬをしめ此もたって足し
宿並の房りれて主中ハ開の流るの来るるるを深き
此明るも仍ろう隔場隙積せまりつさて小諸節の立風ハ

[illegible]大経師[illegible]紙漉[illegible]始の主の
種類多し其外[illegible]中にも[illegible]行商とて
かの[illegible]出生[illegible]もあるべし
東の[illegible]　[illegible]
其[illegible]常[illegible]明[illegible]
きめの[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]

此紙ハ[illegible]して紙[illegible]ハ紙也
[illegible]して入あまねく此国の[illegible]場ハ[illegible]
称すべし
明[illegible]　[illegible]
其[illegible]ハ[illegible]の[illegible]人も[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
を[illegible]此の[illegible]

あら田の人に酒出して飲ませつゝ此ほとの事ともかたり居
来遊のよしいひてかへりける

十六日　快晴

雪中の霧快霽して見わたせは赤城の嶺の形見えわかれて
山のすかたさへありありと見えたり遊歴の人に
やすらふほとにはや○岡本氏より人を遣はしてまねかる
其人の書ともかたはらの書画の類あまた見せられける
手中に筆を染て山水をかく一圓の花鳥にならひ給ふ

ちからの事にも及はれて書画の類を
出て其書画を見る事いとめつらし

○扶桑珠璣談　○扶桑國之画圖

縁をたつね探し見るに其人の子孫につたはり
縁の額筆法のいとうるはしき下の縁の額
人のこゝろにしみて昔のことをおもふ此時の事
縁のまへに柯則にて其人の事を聞て
ことに縁の事を終りぬ

姨ヶ田しぐれのころ寂びし　似船

姨ヶ田の稲につくる見渡す代と浮し寄鹿の夜も拂はる

旅の縄を引て旅寝も通ふにて猿猴より陰

涼しさと瀬やしらぬふりて千曲川　、

八幡の宮并に八幡の鐘のひびき 姨を眺めて更科の片岩

我々人に別れて田打の時 鶴の利根湧き出るらん

涼さる山深く 續音の路も駒止めて

山家秋の寝床よしかの寝屋の時雨の袖ぬらし

寿則山をかたどる七人の誠ありしかも打寄せて哉

し　供や　涼しさに弦前も空の影　、

山家あたりこらへ芦田の宮はるか見えわたる人の東を

さ嵐踏わけて弟子にうつりて寄せ連軒をつらね旅人

の跡を問く宿の門脇に口ずさみと事もなふて見ん寄せ

がる人あり十年のあまり此路に跡をとどめ入り倍の住居と

なれ男こゝ儘年を経て過ぐし入んにも思ひ思ふ事

うらみかねて世にかくて杖をとゞめて驛過る

舟路すれハ芦田のや柳や姜ノ滝　御郷
是の辺ハ山間数々として出ぬ時ハ路を行しそ
長井渡橋子の家にて和田宿の宿所ある所に至
全て今道を問ふに橋の際に此所にて渡る也と
申せしに舟を路にしらるゝ所ハ大井川と云ふ由の
橋も無く舟にて渡る
新にし大井の川かゆし
長井渡の宿ハ山家にて因るへき人少なくして宿の家の

折節御代の道に来る事の如きも春の中柳の茂る所ありさゝ
世の人の感すること多くあれはいけハ是より八里計りの路あり
和に従ひて参りて来り飛脚の如し

十七日　快晴　巳ノ刻ゟ風吹　東ノ方天気　晴天
此郷ハ数多の旅人も往来せし所にて皆旅宿有也
出起さして和田峠を越る此辺の宿所にて
出る所は如くにして路ハ難所にて沼田の上を行如し此所の事也
此所より五余里ハ松平花桜芝の様にて渡る事となり

鐘の音を聞て旅宿を出し月のあかり切なるにみちたり観
音堂の柱に立並て酒肴茶菓の家々ならひ商人あまた
集まり紙の幟を飾りけり

氷　踏しめる音や寒の月し　徳明

常陸岡崎十州楽の朝より後なる也り御山なれ
朱り高林山葛の鶴嶺し行れも東に明ふ橋つゝ
瞬かれてる風はりは山も又絶境といかゝとえる舟し

舟　帆から中なる春の朝曉

また九州を下る東文楽見物の見物人談話の上の価値也
此とかありけり是が陣と語る緑茶船より渋谷代家
是は其の所くに出るて当代の見物の石段刻み水と遊りく
阿るなる手品かてる悪水の跡者の国の也み厳重すりく
人者此まま筆しけるは其れ陣にかる也道ル遊女の二千軍
来りかの楼茶園勤めら蜀の山路を歩りしかなくとも念ぬ

前　娘りの声　ちれし東へし

新しく年始七曲なる切れ抜下なるへ二百年にして下乃

諏訪の驛より五郷ハ志事の跡を越へ深くして坂に
諏湖の様鏡の如し
一湯の湧出る事諸方の湯の流 物多
此所ハ五月の末にあらしても湯は冷かに先月の神社に
上和らけ生の湯より新ハ造營を社壇廣深無量
誠に奇麗神佛の附物の植樹仁獸等如く方上を
尊き高祥殿に前由らく
御喚あり神さまつて神座

社壇をめくり東の方十町ほど御手洗川に沿いて上の諏方
下社ハ秋宮に御湯を流れさ瀬を傍にて湯壺
の留所に言ふ此の湯に浴み身の垢を流しの何某常
真の御諏方念に参り御の杜を木々中あらし人の存
情をうけねつあらし観音にひらしやれ是の湯まいるせ
定うつ眠ん旦壇に入らふ淵つぬ葉に旅の方を見れ
けあけ方へ入んとて御湯を立ん誰れ二三子の来れるを
惜しくて而後あすハ近在森陰へ立の寄上京路あら

並ニ尊阿聖人一所ニ[illegible]　御[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

十八日　雪降　晴天ニ止テ[illegible]　午時より快晴

軒の[illegible]の[illegible]門[illegible][illegible]
西山[illegible]佛前[illegible]入[illegible]尊阿聖人の霊[illegible]

寛政二戌天
霊菴感覚尊阿比丘
八月十日

御寺ニ付聖人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
六尺二寸[illegible]
[illegible]一[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]　似加

[illegible]　[illegible]

許して西家道より藤野か在所へ西ゑさまかけられりくは通西
の松のひみはしらし野路の家ゑて或は備前の人まかえ
宗利の主弟かけ松の孫ともなる部屋をもる十二を詠

朝出て　みわたせは　かれて　松の色　　宗利

心柔て　利へ　月を　見とりかり

ちり残　ちりかゝり　露深し

時さりの　雲と和して　西ゆく　松の音

行水　ゆく　吹わり　中　松の風

ちる日の　新贄て　夜り　行　絹

松屋　こすは　佐らし　ゆ給ふの　む

あきての　こ和ゑ　西わ　松の　風

ゑて寒の　新て　逢きりく　萩ふり

続給　乃　絹の　主の　秋ひより

ひと川　さ月と　東を　むつる　秋

落中かる　夜ゆ　いゑ　東まの　空

右

主人は此深川芭蕉翁の庵の跡に猶芭蕉庵中
結ひ翁遺物の庵の跡をしたひ句を静かにたのしみ翁の像を
納め井戸をも今に存し芭蕉庵の士朗子ら是を庵の記を書て
見せ給ひし申す

芭蕉川と申ハ翁芭蕉の流のみの
本間乃芭蕉庵主にて来る事も

尾州深川の隠士芭蕉庵
濃州大垣の隣人芭九多樹
尾張同国の商人
いま

それぞれの句を記ける

何れ人乃庵をむすふ芭蕉川　本間

主人よこに在もや芭蕉川　芭蕉

此句は翁の芭蕉庵の事をしるせし

栗書ひ記を印し小冊として申すに寄記の附たる

粛六宮　桜宿

栗書をみるにも記の旅の葉の庭　士朗

小冊を携て青柳すへ月　長六

春の夜何山寺の鐘かくせし
梅庭

雲のゆく遅し夕かすみけり
紀布

ありやくは野の花御膳鴬く
华堂

みしか夜や二日月影涼
定石

白梅の香をやさし神乃庭
乾亭

あらしやの来の春の中より
梧甫

あたゝかや遊ぶ蝶乱れけり
二六

笹乃田にれもとけれぬ
謝

梅の香やかゝる頃の春
布

日はちろしとりさきの姉
定

家折しあれし袖も春の人
丹式

花に法しふえし仏
青哉

何に鳥の啼くや元気乃袖
吟舟

梅乃下来く黄鶯隠れ
室

露安抱の香や雲中小山
石

あられ降る三日月の露
亭

右

御当時仕物小流切の御伝一件相渡候

智臨 在判

あらし吹乃こゝろにたちつゝ春のうちなる　素傑

さゝれ石りるかの雪ゑをわけて御れ　云門

右

なりゝ潮也りし立ゆ中に蕉人を入来ご無○には判されえまして
今宵は郷路もん出ゆか十なりしぬれぬえより不明わたるとも
巨濤に脇を曲りて鮮鮑すなるは上臺の讃を離れず

雪 九年 母系の紫来て隣やる　以那

勝 白玉珠にもれん小さすまし○三代への入来をあ廿続こえ入すとく

今ハ俳諧天下にはやりて貴賤となく
無道もの家ニ頼ミ出入して素人宗匠の門に逢ひ
此宗匠を仰ぎ出して道をも流布あるハ大事也
のかのあとも業しの家を好みて買ひとるもの也 ○呂利
其の方と言ふ其の貴賤の人の文を好むものの此より無下
訪くは店に自徳のみ表となりて貞くに走りて動き給ひし
陽る素人宗匠にして無禄の備へもなくの事は中子宗匠
其まゝに後し諸好み堺にて席を代宗匠の道をも極め

蠅に様子らには病むも人之法ら物敷らして此の事を ○貴賤
五の年呂利かの戸を出して其の素人宗匠の深く此の俳諧とともに
之呂利子も世界と悟り人の子を尋ねて帰りし此の門を極
中ニ宗匠鶴亀の二門宗匠の家に入りて俳諧の秘ら
かくて其の中に病むのあとも伏されども門をも宗匠とて定め
宗匠には出入して時に病人ハ長物とともにされども付けるを極
法あって道あるく俳諧もよしとなく古くからの
仏道迄すくく俳諧すのみ

妹浮や夜桜よことし帆番　似船
汁めしのけしき見えぬ嫁　云門
おくりむかへ足りなく明く　青衣
あつしと怪而の立けり　呂利
円かりしの酒ゑもらへのみ出　露人
春順
探郎
みしの川々の流れし秋の道　青衣

心残る盃ちからも先尻泳　露人
茶のみばや帰り乃中を合ふる　呂利
雲浅き高も滴ここあふれ　云門
柳陰にうつししもみぢこそなり　似船
雨をかしさらさし浦の梅枝
嘘さや雨霧の夜空の明ぬ
右
二月之人への白紙厭く攀射積も駒くのほとり道

寺中は一向遍なく一廻の間つけて直実の墓は[illegible]
してあり寺僧のありて中に老人とも剥なとも見んのはなき
分さる謝礼をいふてさる出立の細して[illegible]捨てりし之御
諸国より遊覧の者ども見えて神事ある日なりし付多く
詣でぬ立門を出て雲の上に静なる[illegible]て[illegible]

十九日 快晴 出立

[illegible]
[illegible]
[illegible]

椋鳩とは案内して[illegible]
[illegible]
[illegible]
行

氷向かふ捨も葉つくる秋の[illegible]
[illegible]中
上諏訪社頭にて
雲水[illegible]
[illegible]

又こゝ嗣子ありて見えて郵筆ちんといふやうなれども身
得と言ふ給ふ所はゆ風ふく所の例を嘆く人言とも
○寺に大驚へとの一思ひを語ふ郷乃まで宮蘭
所のふ言也ぬ○かの流州ふもを語ふ時節に見り抱みみ
年と乗る青衣ニ子の地統前にも外つて西脇おりてしと
此ゆる物をかゝけて是正意子の修学のなるに流佛々に
内より金室来の二子刻と横羅よく案の子は諸の言を
京は京で雨露の里に入りぬ人の天年子

置字

はなより嵯峨ぬり壁を振嫁　艸叟

艸巣居武議

言ひを梅藤林かく里も法邑寺　如加

子を営庭に見つかに来そのる　艸叟

老鳥の鳴のかに鍬かりて　、、

松と松との露の中道　加

まて霧も鴨に煙の風の月　、、

氣りおのれに来たる本陣探なり　史
宿々川部れて下る御馴染　、
茜蜘御りぬ菅笠の母　加
冷飯茶の時分し膳を持出て　、
暇乞を斎ては是のこぼれつ　丈
まきれの其の紅咲く　、
若艶やまきを伴りして　加
山里も時雨の降るなく　、

みせりて月の宿更ミえ　丈
たまれて浅茅の陽しとりうる　、
四五軒嘆しに初花　加
頼もり篠の堤に小鶴雲　、
楊羽の峰乃旗を翻り　丈
え風ては蝉の浪の音　、
おのれの作り色こそうゝ　加
老しれ頭ひかも　、

絶しきやう小風呂吹を煮る　夫
小包りに勧化の筆を染て　、
より松なかし鏡を寺子と　加
二三日留りに断く祇園参　一
明ん乃郷へ持る殊多小鳥　夫
蝶々草切に清女の業花に　、
人さいりしきしはいて　加
陰りし時に月小村子時　、

如露し川に石瑠璃咲立　夫
牛乞の御世話花束の結　、
炭一俵なと寄合て買ふ　加
攝尓絹乃動き乃川に軒の蜂　一
御前長栄に専尾取ねる　夫
罷りハ尾人のこゝも房の時　、
来る秋ふへく底の庵乞路　加
右

此物能く[illegible]を下し

暑[illegible]淋病を退るに用ゆ

此ハ[illegible]也

此水[illegible]の主無名[illegible]入来[illegible]の腫毒ヲ解して[illegible]

このあたり[illegible]積[illegible]たるにあらし

赤旧

一名[illegible] 先[illegible]ハ早[illegible]し

此味甘ク酸く積させ[illegible]脳[illegible]して其味の気味此ハ

[illegible]新[illegible]眠[illegible]ふか[illegible]云つ[illegible]

[illegible]しく[illegible]積[illegible]へし[illegible]

味の気[illegible]此を[illegible]

[illegible]ひ[illegible]積[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]云つ[illegible]

[illegible]の[illegible]の園[illegible]

[illegible]人[illegible]おふみ傳[illegible]

奥茶摘も来りて箕しかせ見て式海をいふ

道

曽参乃孫也備えて忘ん悲海　桂里

相槌于六川乃ま中武備

狸于尾鐵乃孫也種子海　竹史

辰野乃出判読ゟ人武海　似水

右

主人と御見る乃西御吹て鶴絶と寺武は萩縁

人乃稲捻も日ゟ方ゟ流れ春りて紫村ゟに海ゟ訪
いかにはゟ伺ふ人翁出しえりて山犬乃出りて人敬ゟ見ま
ちやり子仇も出まゟ川を打こ人を見せ加と逃てゟ山ゟ捻て
也らロ採捧ゟ現加と投て人ち西ゟ先巡ゟ程なくこの山
年かりて光を稲めしてさゟのゟ南ゟ附乗りて逃舟してゝ
み稲を巡りゝれいてかぬゝ来しゝ上後ち現れと川ゝゟ見ゝ
挽師定をとゝみすのあ出かゝいすふ郷郷ゝ安堵して行
一乗かて浩白杉れのむ乃命ゟ然

似水

斯くて名高の釜石の郷路に出てぬ又解毒し
一角といふ薬を得て見て過り侍るけしぬえとらり
翌ハ野沢を過ぎりて御所へ師子を師しきぬ

廿一日 快晴 大霜

家々に朝顔の花咲けるを見て又人の心の
障子を開けて坊の常の時刻を定めたり此の
ぬるまで四季の絵人を読みて絵師の好くてよく又
画讃一紙書きて送る朝顔の花咲く名残をも見ず

ちかれは朝顔ぬれて道えきの花なり

京都二条通柳馬場

蔭茶屋 安理遊子

此玉の好運にて御所へ参りて上一段の道心ありける
柱の橋虎の尾ぬれし折から師の道の旅宿を送りしに
扉わりて陰のうち仰ぎ中へ招き寄し礼いふ名残して出でよ
竹の葉の蔭の人
八丈道も比良の海路へ行きへ見て来

棲里

新古の川添りしてみ家も引る所あれ之ハ了尓も兵衛出
せられ皆さ此を大和の境なしけれも二藤出て其ある社又
出づ候りしけり

吉野山の東も躍する 飯綱の山 山路

新り茶波川乃鶴駒し添りり田中の傍りつ氷比白
光て茶葉うしりて大和まあしも解りしかり添りのしたる
結み様ろる也女郎りそ舟〇素楽京也語り悔をやれ
新り絵りり宮の行ても法の伝りたを賀るのく